

# 「60代からこそ、素晴らしい人生」

マサミ・コバヤシ・ウイーズナー

Assistant Director IMPACT (International Medical Program for AIDS Clinical Training)

もう10年以上も前、日本人女性建築家3人がサンフランシスコで太平洋の絶景を見下ろす海岸ドライブを楽しんでいた。大学時代からの仲良しという3人は60代で、案内をした私は3人の賑やかな会話の中で、40歳を過ぎた自覚からジギタリス(花言葉が「私の最良の時は終わった」)に魅入られた感傷にふけっていた。3人は意外にも60代こそが人生最良のときと主張していた。仕事をする女性の60代は、知識、経験、実績、人脈、技術の集積、体力もまだ充分、セクハラも無し、押しも押されもない実力通りの仕事ができる。年功序列で優先され、男性と対等に扱われる。かと言って見栄を張る必要もなく、体調や「ちょっと」を理由に義務を欠いても許される……。

その時は半信半疑で聞いていた私も、その年齢に近づいてみると60代を生きる魅力も予想できるような気がする。

## ■ 60代がNPO牽引エンジン

アメリカでは年齢差別禁止の法律に沿い原則、定年制度がない。ただ、60歳を一区切りとして、あるいは公務員で20～25年間働き恩給受給資格を得るタイミングで、現役から引退する人は少なくない。その後60代の素晴らしいエネルギーの一部は、ボランティアに向かう。引退の噂が流れると各種NPOの助っ人にと呼び込まれることもあり、ボランティアセンターなどがマッチングやコーディネートをして、必要に応じトレーニングも紹介する。

当然とは言え、若いボランティアとシニアのボランティアは、作業の質が決定的に違う。若い層はボランティアチャンスをキャリアのスタートと考え、飛び込み台、トレーニング代わりに使ったり、ありあまるエネルギーを抱えてひまつぶし、自分探しの一環に利用することが多い。好奇心いっぱいながら実力が伴わない。またやる気は充分でも、仕事のスキルが身についていないので成果に結びつかない。時間管理や自己管理が下手な人も多い。嫌々ながら手伝うケースもある(裁判所命令で、コミュニティサービスをするなど)。

その点シニアは自分の能力や技術、それに伴う限界も

知っているし、自分に合った作業を選ぶので、即戦力になる。60代のヤングシニアは人間関係も上手、事務処理やコミュニケーション技術に優れた人も多い。最前線を引いたばかりのまだフレッシュな知識や勘や人脈も、今まで貴重な資産だし、長年磨きをかけたスキルが生き、責任感も強く頼りになる。NPOが彼らを取り込めば、各種のプロジェクトもスムーズに動く。

アメリカのNPOには10代から80代まで多世代のボランティアが関わっているが、内実は60代のエンジンに牽引されていると言っても過言ではないだろう。表向きには30代の女性が事務局長としてバリバリ働き、その裏ではご両親世代の60代が潤滑油的に力を発揮—そんなバランスで構成されている組織を良く見かける。

## ■ 高齢者サービスを支えるシニアボランティア

私は1980年代、カリフォルニア大学バークレー校で精神保健(臨床心理)などを学び、シニアの情操コミュニケーションが卒論研究課題で、その間日本からの客員教授の障害者自立運動関連研究を手伝った。90年代前半は全米障害者法の翻訳やハンドブックの執筆、90年代後半はエイズ医療でボランティアやエイズコミュニティケア制度の講義や執筆活動。2000年前後からはエイズ研修やシニアに関する講演活動に携わった。アメリカでの30年間の暮らしの中で、精神障害治療、身体障害者権利擁護、自立運動、エイズ統合ケア、患者の人権擁護そして、シニアのライフスタイルと6分野に関わった。

このアメリカのアカデミアや現場で見たボランティアについては、いくつかのことが強く印象に残っている。(1)ボランティア(無償)の数が多い。(2)どの分野にも幅広い年代のボランティアがいるが、分野により年代に多少の強弱がある。(3)ボランティア活動に求めること、貢献できることが年代ごとに違う。そして(4)ボランティアとしては当事者(または当事者に一番近い人達)同士の相互扶助が、最も強力で効果的な結果を生み出している。



マサミ・コバヤシ・ウイーズナー  
*Masami Kobayashi Wiesner*

カリフォルニア州立大学バークレー校（心理学専攻）卒業、スタンフォード大学大学院（社会心理学専攻）中退。現在はサンフランシスコで通訳者として活躍するほか、「のびる会：新渡米者の会」顧問（元会長）、NPOワークショップシリーズ講師などを務める。近著に『シニアが活かすアメリカのNPO』（現代書館）がある。

この(4)の例に漏れず、高齢者向けの福祉、慈善、教育、情報啓発の非営利サービスは、シニアボランティアや働くシニアが大きな力になっている。

一方日本では、福祉の担い手と受け手を全く別な存在として考えている人が多く「高齢者は福祉の受け手」と考える方が一般的なようだ。昨年12月に大東文化大学で法学部生対象に「アメリカの社会福祉制度」について講義をした。授業中に学生たちの福祉のイメージを尋ねてみると、殆どがお年寄りの介護や支援活動、障害者対象がその次の答えたを得た。

アメリカの福祉制度は、基本的には障害者（慢性疾患や慢性障害を含む）が対象で、高齢者だから福祉の対象、という発想はない。もちろん慢性疾患や怪我や卒中などによる障害を持つ人には高齢者が多いが、反対に75%の高齢者は基本的に自立生活をしているほどに健康だ。彼らのうちには、子育てを終えて時間に余裕があり、人生経験を活用して福祉を支える立場になる人たちがいる。

## ■ 有償ボランティア

日本では、ボランティアの有償・無償の議論があるようだが、アメリカでは「有償ボランティア制度」は、失業対策・貧困対策の一種であり、有償ボランティアはその受け手と位置づけられている。

倒産農家・農場の働き手を、自然環境改善や園芸事業に有償ボランティアとして奨励したり、失業者を職業訓練のインターンとして受け入れる職場へ奨励金を出すとともに、インターンを有償ボランティア（強制ではなく、金で時間やスキルを売るのではなく、自ら任意に働くという立場）と位置づける。また自分の生活が苦しいのに里親を引き受けてくれる人（親が不法薬物中毒や犯罪で入所中に、その子ども（孫）を預かる祖父母など）に有償ボランティアとして最低賃金の時間給相当の補助金を出す、というような公費で出資する数々のプログラムがある。

これらのプログラムには全米で既に数千万人が参加したが、生活困窮者向けの経済対策も兼ねているので、時間と

やる気はあるからバス代さえもらえば必要な場所に行ける、というような人たちが対象となる。

民間での有償ボランティアとなれば、NPO事業ではなくNtP0である場合か、宗教集会の手伝い、政治集会や選挙活動、選挙実施の手伝い、各種の非営利目的会議の開催手伝いなどのボランティアもある。それらは交通実費や食事代、なかには宿泊券をもらえる事もある。

日本では「せめてわずかでもお小遣いがもらえば、やる気が出る」という言葉を耳にする。また、お金をもらうのは本物として認識され尊敬された証拠、無償では口車に乗せられて体のいいタダ働きをさせられたと同じというのも、あながち間違いではない。活動状況もないとは言えない。ボランティア団体と称していても、案外グレイな経営や管理状況もありそうだ。

また最近の日本では「ありがとうと言われるだけで嬉しいから、ボランティアします」と素直に言い難い状況もある。頻発される「ありがとう」や「お願いします」や「助かりました」という言葉が営業習慣や義務的儀礼的慣習で使われることが多く、悲しいことだが心がこもっているとは思えないことも、多い。

アメリカのシニアボランティアに動機を尋ねると「ひまつぶし」から始まって、「宗教心」、「精神修養」、「自分のした苦労は新しい世代にさせたくない」さらには「ここまでられたのは社会のおかげ、今はお返しの時期」と実際に様々な答えが戻ってくるが、「自分が見せる善意がそのまま感謝され、誰かの助けになれる実感でき、社会に貢献できた満足感を得たい気持ち」は、間違いなく共有されているのではないかと思う。

## ■ サンフランシスコでのボランティア

サンフランシスコは住人の2割近くが65歳以上の都市で、多くのシニアボランティアがいる。そのうち日本街で見かけたシニアボランティアを2人紹介したい。

Mさんは日系三世女性。市の移動図書館が本とMさんを



サンフランシスコの  
移動図書館



車内の様子

トラックに乗せて、私の住まいに近い高齢者住居施設に月に1~2回やって来る。日本にいる私の実家の母は、週1回、お豆腐屋さんが小さなトラックでちりんちりんとベルを鳴らして来るのを楽しみにしているが、こちらでは市の図書館が出前で本を運んで来る。

彼女は自分が選んだ何冊かの本をカートに乗せ、廊下をドアからドアへ回る。「この前のはおもしろかったわ。またあの著者のがあったら教えてね」「おもしろいって言ってたけどあれは全然だめ」住民との忌憚のないおしゃべりを楽しみながら、Mさんは忙しくカートを押して歩く。「これ、どう?結構いいける推理物だと思うけど」セールストークも交えて、一通り新しい本を配り終わると前の本を集めてまたトラックへ。本を返すとトラックはそのままMさんを道に置き去りにした。彼女は「ここからは歩いて帰るの。もう今日はおしまいだから」と歩き去って行った。

彼女は「図書館のフレンド」というNPO組織のボランティアで、住民への貸し出しだけでなく、勉強会や読書会の企画・運営から、不要になった本の売却なども担当している。移動図書館車への同乗を始めとして、週に2、3回ほどのボランティアだが、「案外重労働なのよ。毎日やったら体力もたないから」「でも、図書館がこのために人を雇うのは予算的にとても無理、自分の趣味だけでなく、経済的にも地域に貢献している実感はひしひしと感じるわね」と誇りをもって働いている。

もう1人のSさんは日系二世の女性。日系人強制収容所経験への謝罪と損害補償額を決めた法律を国会へ PUSH し、それが通過後実際にお金が配られるまでのさまざまなプロセスを、一つ一つ固めていく一連の運動に多大な貢献をした。収容所時代は10代後半だったが、アメリカ生まれなので連邦政府の事務職を担当、収容所内でアメリカ兵たちと並んで働き、その後も引き続き連邦政府に勤務。

定年後(当時は定年制)の60代は日本街で暮らし始めたが、それからが彼女のボランティア生活のはじまりだった。日本食ランチプログラムの手伝い、桜祭りの下準備、日本街近辺

の地域ベース非営利組織で、彼女のボランティアの恩恵を受けない組織はなかったと噂されていた。教育・慈善・福祉関連組織の緊急時のライフラインで、空気や水のような存在でもあった。

その一方で「歴史的な失敗や間違いにはきちんと目を向け、ありのままを理解することでしか日系人の傷は消えない」という信念のもとに、多くが沈黙する中一人強制収容所の経験を話し続けた。地域の小中学校、高校、大学と誘われれば、どこへでも出かけて行ったり、60代、70代を通して数え切れないほど地域貢献などの賞を受賞した彼女の名は、今はフィルモア通りのレンガに記されている。

### ■ ボランティアの心意気

ボランティアとしての関わり方やそれが持つ意味は、年代ごとに違うのは当然だ。それぞれの年代なりのボランティア活動が、非営利組織に実体的な安定を与えてくれている。前回のNPO事始では、資格を持った優秀な若者がマネジメントを担当することで、アメリカの非営利事業にも新しい動きが生まれていることに触れたが、昔も今もそして多分これからも、60歳からのシニアボランティアの経験と存在を抜きにしては、アメリカにおける非営利活動を語ることができない。

日本でも団塊世代が定年を迎えることをきっかけに、シニアの社会との関わり方が大きな関心事になっており、また昨秋からの経済的な打撃が雇用の形態にも大きな影響を与えているようだ。

そのきっかけやその形態が何であれ、自分の行為を通じて困っている誰かの役に立つこと、それが社会を少しでも良いものにする一步になるという素朴な気持ちを、お互いが無条件に信じあうことなしには、ボランティアは成り立たない。

社会の第一線から引退したシニアは、営利でも名誉でもなくただ純粋に社会のために、その持てる力を使えることを素直に喜べる。60代からこそ、素晴らしいかな。